

Title	コーランの創造論をめぐる諸問題
Sub Title	Consideration of some problems concerning the creation in the Koran
Author	牧野, 信也(Makino, Shinya)
Publisher	三田史学会
Publication year	1967
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.40, No.2/3 (1967. 11) ,p.287(449)- 308(470)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松本信廣先生古稀記念
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19671100-0291">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19671100-0291</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## コーランの創造論をめぐる諸問題

牧野信也

コーランは回教徒の立場から見れば予言者ムハンマドを通じて啓示された唯一絶対の神アッラーの言葉そのものなのであり、又我々にとつてはムハンマドという一人の予言者が、目に見えぬ、しかしこの上なく強力なあるものに圧倒され、忘我、恍惚のただ中に於て口走つた言葉の集大成であるが、いずれの立場をとるにせよ、ここで予言者という一個の人格を中心にして展開していることは明らかである。ところで予言、乃至は予言者を問題にするとき、我々は先ず、回教とも密接な関係にある古代ヘブライの予言者達を念頭に浮べる。しかし、一口に旧約の予言者といつてもそのあり方は多様であるが、そのうち最も典型的な所謂古典的予言者に注意してみるとコーランに於ける我々の問題を設定する上で非常に有益な示唆を与えることがあるのに気がつく。それは、時間の把握の仕方に関連して、イスラエルの予言者は何よりも先ず世の終りとしての終末を明確に意識し、世の始め乃至は天地・人間の創造については稀にしか言及しておらず、又世界の始について述べている場合があるにしても、それはあくまでも終末との類比アナロジーにおいて考えられているということである。(注一)これは歴史乃至は時間に対するイスラエルの予言者の根本的な態度と深いかわりをもつことであるが、それは今は措くとして、ここで我々のコーランの問題にかえてみよう。

旧約の予言者の場合見られるようにコーランに於ても終末はこの上なく事大な事柄として繰返し強調して述べられている。ところが旧約の場合と対比して著しいのは、ここでは創造に関しても終末と劣らぬほど屢々、しかも非常に大きな力

点をかけて述べられているということである。ここでも創造は終末の類比として考えられているにすぎないのであるか。また、もしそうでないとしたならば、両者はコーランに於てどのような関係に立つのであるか。時間の流れにしたがつて単に始があつて終りが来るという謂わば並列的關係しかないであろうか。このことを明らかにするのが我々の最終的な目標であるが、その前に先ず創造及び終末のそれぞれはどのようなものとして考えられているか、つまり、どのような物質的及び精神的構造をもつかをいろいろな角度から明らかにして行きたい。その際、一般に民族の世界像は言語、殊にその文化的に重要な語彙の構造に如実に反映しているという意味論上の根本的な考えから、先ず我々はコーランに於ける創造及び終末に関する重要語 (key terms) をえらび出し、それらが夫々の場合に於て相互に形成する網の目のような複雑な関係―意味の場―を探り出して行く。そしてこのような作業はとりもなおさず、これら重要語の背後にある創造をめぐる諸概念相互の關係、及び終末に関する諸概念相互の關係をたどることになり、コーランに於ける創造及び終末の構造を先ず全般的、概括的に見ることになる。その後で我々は創造及び終末の根本構造を具体的な諸相からとらえ、分析して行く。このようにして創造及び終末それぞれの構造が明らかにされたならば、最後に我々は、上述のようにコーランに於ける両者の關係について考察する。

上述のような問題の設定と全体的な構想のもとに、我々はコーランに於ける創造と終末をめぐる包括的な研究を現在、英文にて執筆中である。本稿では紙面の制約上、そのうちの創造に関する部分の骨組みともいうべきものを示した。更にもこの上になされる肉付けや、又終末に関する部分は間もなくあらわれる上記の英文モノグラフィに於て詳細に扱われる。

### 創造をめぐる重要語 (key terms)

コーランに於て創造はどのようなものとして考えられているか、いかなる物質的及び精神的構造をもつかを具体的、分

析的に考察して行く前に、先ずその全体について概括的に見ようと思う。前節で触れたように、民族のもつ固有の世界像は言語、殊にそれを構成する文化的に重要な語彙の構造に忠実に反映しているという根本的な立場から、我々はコーランに於ける創造の全体像を先ず把握するために創造に関する重要語 (key terms) をコーラン全体より選び出すことから始めよう。

創造一般に関する key term

創造する (khalaga) / 創造する (fatara) / 創始する ('ansha'a) / 創始する ('abda'a) / 設ける (ja'ala) / 創造者 (bari') / 創造者 (badi') / 生ずる (kana) / 期限 ('ajal) 意志 (mashiya) / 意志 ('irada) / 権能 (qudra) / 真実を以て (bi-l-haq) / 容易 (yasir, ahwan, gair 'aziz)

天地創造に関する key term

作る (bana) / 作る (raf'a) / 層また層に (tibaqan) / 延びず (madda) / 広げる (daha) / 広げる (basata) / 広げる ('awsa'a) / 敷く (farasha) / 平にする (mahhada) / 平にする (sataha) / 乾かす (fataqa) / 整える (sawwa) / 置く ('alqa) / 置く (wada'a) / 平にする (nasaba) / 据える ('arsa) / 通す (salaka) / 巻く ('awra) (kawwara) / 被る ('agtasha) / 乾かす (salakha) / 飾る (mahā) / 飾る (zayyana)

人間の創造に関する key term

形作る (sawwara) / 整える (sawwa) / 釣合む ('addala) / 息を吹込む (nafakha) / 生かす ('ahya) / 出す ('ak-hraja) / 生やす ('anbata) / 土 ('ard) / 埃 (turab) / 陶土 (tin) / 火 (nar) / 水 (ma') / 精液 (nutfa) / 凝血 ('alaga) / 肉塊 (mudga) / 骨 ('azm) / 肉 (lahm) / 肉を着せる (kasa) / 一段一段と ('atwāran) / 悲惨 (kabad) / 弱る (du'f)

## 創造の空間的構造

— 天地の創造と人間の創造 —

前節でコーランに於ける創造について先ず全般的、概括的にみるために創造に関する重要語をえらび出した。以下に於てはコーランの創造における個々の重要、且特徴的な面にいろいろな角度から光を当ててみよう。そこで、本節では先ず、世の始に全智全能の神アッラーによつてなされたとコーランの説く創造の構造、ことにその空間的な面を問題にした

い。  
コーランに於ける創造について考察して行くにあたって先ず第一に重要なこととして、天地乃至は自然の創造と人間をはじめとする生物の創造の二つに分けて見て行くことがコーラン全体を流れる創造の思想ともよく合致するのみでなく、当面する我々の問題を考へて行くために有効な観点でもあると思われる。では天地の創造から見に行くことにしよう。

まこと、汝の主はアッラーであるぞ。天と地を六日で創り (khalāqa) 、それから高御座につき、昼を夜で覆い給え (‘agshā) 夜は昼を休みなくせつせと逐つて行く。<sup>(註三)</sup> (七章五二節)

天と地を創造して (khalāqa) 、夜を昼に巻きつけ、昼を夜に巻きつけ (kawwara) 、また太陽と月とをとり抑えて (sakhkhara) それぞれ定めの時 (‘ajal) まで走らせ給う。(三九の七)

天地創造に関するこのような叙述からは創造する (khalāqa) ということによつてどのような事態が述べられているか必ずしも明らかではない。しかし更によく注意して見て行くと、このように神が天地を創造したということが漠然と述べられている場合のほかに天の創造に関しては例えば、

大空を高々と持ち上げ給う (rafā’a) (一三の二)

天をしつかりした天蓋 (saqf mahfuz) にし給う (二二の三三)

空に十二宮を設け (ja'ala) 飾る (zayyana) (一五の二六)

蒼空に太陽と月を置く (ja'ala) (二五の六二)

天をうち立て (bana) 掲げる (awsa'a) (五一の四七)

に見られる如く天蓋のように天をうち立てることがのべられる。また、

(地上の創造が終ると) 今度は穹窿に昇つてそれを均等に七つの天となし (二の二七) に於けるように天の区劃を定め、蒼空に星の宿り (十二宮) を設け、見る者の目に燦然と輝くようにし (一五の二六)

大空に太陽と月を置き、それぞれに天体が配置される。また天の創造に関して次の例は更に注目しに価する。

それが済むと (大地及び食用の動植物の創造) 今度は天に登り給うた。その頃はまだ天は一面濛々たる煙。そして天と地に向つて「さ、お前たちここへ来い、喜んでくるか、それとも迷惑か」とおつしやると「喜んで参ります」とお答えした。そこで神は二日間それを七つの天に仕上げ (qada)、各天ごとにその役割を言い渡し給うた。かくて神は最下の天を数々のきらめく燈火で飾り (zayyana) かつその護りをかたくした (四一の一〇一一) つまり、ここで述べられている天の創造とは、ある素材をもとにして、それから全く異つたものをつくり出すというよりは、むしろ、すでに在る混沌とした天に於て区劃をきめ、天体を配置し、それぞれの役割を定め、秩序を与えることと理解される。

他方、地の創造について見るならば、

大地を敷き揚げ (nadda) (一三の三三) 伸ばし (awsa'a) 平にし (ja'ala dhalīlan) (六七の一五) 生きたものも死んだものも容れるうつわにし (七七の二六) 大地を揺籃、山はそれを不動の台としてがつしりとめる杭にし (七八の六)

／道をはしらせ、二つの海の間にしきりを設ける(二七の六二)。また、天と地とはもと一枚つづきの縫い合わせであったのを我ら(神)がほどこいて二つに分けた(Fataga)(二一の三一)等に見られるようにここでも全くの無から創造されるのではないことは勿論のこと、素材となるものから、それを質的に変化させて全く別のものを作り出すというよりは、天の創造の場合と同じように、それぞれのものに空間における位置づけをし、役割をきめ、秩序を立てることとして把握されていることがわかる。

かような天地の創造に対して人間の創造はどのように考えられているであろうか。

天地創造に関して見たように、秩序を与え、整えるという面も人間の創造に於て確かにみとめられる。例えば次の例におけるように、

汝を創造し(khalaga)、形よく整え(sawwa)、釣合わせ('addala)御心どおりの姿に汝を組立てて下さつた(八二の七一八)

人間を創り(khalaga)、ととのえ給う(sawwa)(八七の二)

しかし、よく見て行くと、このような整え、秩序づけるという要素はコーランに於ける人間創造の特徴を形づくる決定的なものではないことがわかる。では、人間創造の場合の重要なモメントは何であろうか。

人間の創造は具体的には原人アダムが世の始めに創られたことによつてあらわされるが、コーランによれば、神は最初の人間を塵(turab)から(四〇の六九)／或いは、大地('ard)から(七一の一六)／或いは、陶土(tin)から(二三の一二)創り、出来上つて息を吹き込むと生きた人間となつたとされる。つまり大地にせよ、塵にせよ、陶土にせよ人間の肉体とは本来、全く関係のない、異質の素材でつくられ、それが何らかの変化を経て人間となつたと見る。

また、後で詳しく述べるが、人間の創造に関して次のような注目すべきことがある。即ち人間の創造について述べられ

る場合、今のべたような原人アダムの創造と同時に後世の人間の誕生がコーランでは密接不可分の関係に於て考えられているということである。一例をあげれば、

我ら（アッラー）が汝らを創造する（khalāga）に當つては、まず泥（turāb）からはじめ、次に一滴の精液（nufta）、次に血の凝り（'alaga）、次に肉塊の完全に形なしたもの（mudǧa mukhallāga）、まだ形なきぬもの（mudǧa ǧair mukhallāga）という順を踏む、はつきり汝らにも理解出来るように。こうして我ら意のままのものを子宮の内部に一定期間入れておき、それから汝ら一人一人赤ん坊にして外へ出してやる（二二の五）。

我ら人間を創造するには精選した泥（sulāla min tin）を用い、次にその一滴をがつしりした容器の中におさめ、次いでその一滴から凝血（'alaga）をつくり、次いでその凝血からぶよぶよの塊（mudǧa）をつくり、その塊から骨（'azm）をつくり、さらにその骨に肉を着せ（kasa）、こうしてようやく新しい生きもの（khalq 'akhar）を産み出した（二二三の二二—二四）

ここで興味深いのは、最初の人間アダムの創造に関して先に見たことが更にはつきりした形であらわれていることである。つまり、最初はいやしい水としての精液、次に凝血、肉塊、それに骨が出来、更に肉がかぶせられるという風に、素材としての精液から何段階かの質的变化の過程を経て人間が誕生すると見られているのであるから。

人間は誰でも（人間と）呼ぶことの出来ないような時期（受胎から生れるまでの間）を経ている（七六の一）

お前がたを一段また一段と（'atwāran）順序よく（始めは一滴の精液、次に血塊というふう）創造して下さつたお方ではないか。お前がた眺めたことないのか、アッラーが七つの天を層また層（tibāqan）と創り上げ、そこに月を据えて明りとなし、太陽を据えて燈火となし給うたことを（七一の一三一—一五）

これらの例も人間の創造が質的变化の過程に於て捉えられていることを明確に示しており、ことに後者の例では一段

一段と (atwāran) 順序、段階を経て質的に変化する過程として考えられている人間の創造と、天を層また層と (tibā-qan) 創り上げ、区分を定め、場所をきめ、秩序を与えて行く空間的位置づけとしての天地創造それぞれの特質が際立つた対比のうちによくあらわされている。

要するにコーランに於ける創造の空間的構造に関して著しいことは、或る単純な素材から一定の段階をふんだ質的变化の相において人間の創造が考えられているのに対し、天地の創造はそのような質的变化ではなく、すでにそれとして在るものの形をととのえ、区切り、場所をきめ、秩序づける空間的位置づけとして把握されているということである。

## 創造の時間的構造

### ——創造と歴史——

前節で我々は神の創造活動の空間的な場としての自然に於ける創造の過程の基本構造を天地の創造と人間の創造とが示す際立つた対比という従来注意されなかつた観点から考察した。ここでは少し角度をかえて、創造を、それが行われる時間的な場との関聯において考えて行きたい。

言うまでもなく創造はコーランに於てもこの世界の始に行われ、創造によつて自然と人間の歴史は始つたと考えられている。即ち上にのべたように混沌としていた自然は創造によつてはつきりした秩序を与えられ、規則正しく運行するようになり、また素材としての泥から全く異つた、しかも生命をもつ人間が創られたのであつたから。ところがここに重要なことが見出される。

蒼空に我ら星の宿りを設け、見る者の目に燦然と輝くようにし、これをかたく護つて、呪われのシャイターンに一切手出しできぬようにしておいた。……また大地は我らこれを広々とうち拡げて、そこにどつかと山々を据えつけ、ま

たそこにありとあらゆるものを適度に発芽させ、かくてお前たち自身のためにも、更にまたお前たちが養育する必要のない人々のためにも充分な生活の糧を設けておいた。いかようなものでも、すべて我らの手元に蓄えのないものはない。我らはそれを必ず一定の分量ずつ授け与える。また我ら雨雲をはらんだ諸々の風を放つて空から水を降らせ、それをお前たちに飲ませてやる（一五の一六―二二）。

お前たちのために大地を揺籃となし、そこにいくつもの道をつけて、お前たち迷わず歩けるようにして下さったのではないか。また、天から程よく水を降らせ給えば、我らそれをもつて枯死した土地を蘇らせる（四三の九）。

天と地を創造して夜を昼に巻きつけ、昼を夜に巻きつけ、また太陽と月とをとりおさえてそれぞれ定め新时期まで走らせ給う（三九の七）

讃えよ主の御名、いと高き神、人間を創り、ととのえ給い、行末定めて導き給い、緑の牧草蒔えたたせ、やがてか黒き枯草とはなし給う（八七の一―五）

これらの例から次のことが明らかとなる。即ち、世界の初めに神が万物の創造を完成して了うと、被造物としての自然や人間は神の手をはなれ、それぞれの秩序にしたがつて動き、創造は全く一回限りのこととして歴史から断絶されて了うのとは全く反対に、神の支配はその後も絶えることなく被造物のすべてに及び、歴史におけるアツラーの被造物を養い、保つ持続的な働きや、ことに後世の人間の誕生が世のはじめの創造の延長乃至はこれと連続したものとして述べられており、この点で創造は歴史とつながりをもつていると考えられる。このようにアツラーは万有の創造者であると同時に後の世まで被造物を保ち、養い (razaga)、導き (hada)、育てるものであるということ、つまり上述のように、原初における創造と後世の被造物を保持するアツラーの働きとが連続したものとして考えられていることは一見、何でもなしのことのように思われるかもしれないが、コーランに於ける創造と歴史との関聯に於て重大な意味をもつばかりでなく、更に広く

は旧約聖書及びコーランに於ける創造觀の共通した特徴の一つでもある。創造と歴史とのこのような緊密な結びつきは最初の人アダムの創造と後世の人間の誕生との関聯において一層はつきりとあらわれる。

我ら人間を創造するには精選した泥を用い、次にその一滴をがつしりした容器の中におさめ、次いでその一滴から凝血を作り、次いでその凝血からぶよぶよの塊を作り、その塊から骨を作り、さらにその骨に肉を着せ、こうしてようやく新しい生き物を産み出した(二三の一二—一四)

人間どもよ。汝らの主を畏れまつれ。汝らをただひとりの者から創り出し、その一部から配偶者を創り出し、この両人から無数の男と女とを地上に播き散らし給うたお方にましますぞ(四の一)

ここではアダムの肋骨から妻イヴが創られたことと後世の人間の誕生とが連続したものとして考えられているが、次の二つの例は更に興味深い。というのは、ここでは原初におけるアダム乃至はアダムとイヴの創造が後世の人間の誕生と連続したものとして考えられているのみでなく、世の始めの創造について述べられているかと思うと後世の人間の誕生のこととがあらわれ、また再びアダムの創造に話しかわるといふ風に、両者は組み合わせつて一層緊密な結びつきを見せる。

すべてのものを完璧に創りなした上、人間を泥から創造し、その後裔をばいやすい水の精から造り出し、その形をととのえて、最後に息吹きこんで下さったお方(三二の六一—八)。

お前たちをただ一つの魂から創り出して、同じくそれから伴侶を作り(アダムとイヴの創造をさす)、お前らのために四番、八種の家畜を授けて下さったのもあのお方。お前たちを母のお腹の中に創造して、三重の暗闇の中で創造につぐ創造(三九の八)(——はアダムの創造、——は後世の人間の誕生)

このように原初における人間の祖アダムの創造と後世の人間一般の誕生とが連続したものの、或いはより一層緊密に結びついたものとして考えられていることから、更にすすんで我々は次のような例に注目する。

彼こそは汝らを泥から創造し、それから一定の期限を決めて下さったお方。期限はみなその御胸のうちではつきりと定まつている。それなのに汝らまだ疑つておるのか（六の二）。

話し相手をしていた方が人が言うことに、「君を土くれから創り出し、一滴の精液から創り出して、人間の形に仕上げて下さったお方にむかつてそのような恩知らずの態度をとつていいのか。（一八の三五）

れつきとした神兆ではないか、お前たちを塵芥から創り給えば、忽ちお前たち人間となつて四方八方に撒き散らされたということ。（三〇の一九）

アッラーこそはお前たちをまず泥で創り、次に一滴の精液、次いで小さな凝血から創り、赤ん坊にして外に出して下さったお方。やがてお前たちは成人し、やがて今度は老人になつて行く。その前に召されてしまう者もあるが。ま、こうしてみな一定の时限まで生きて行く。これでもお前たちはまだわからないのか。（四〇の六九）

これらの例において「汝ら」乃至は「君」とよびかけられているのは、それぞれのコンテクストから明らかのように、後世の人間である。ところで後世の人間の誕生に関してコーランは先ず一滴の精液、次に凝血、次に肉塊、次に骨が出来、それに肉がかぶせられ、一定の期間、胎内にとどまつた後、外へ出されるといふ胎児の変化、発育の過程においていることはすでに考察した通りである。しかるに今ここで吾々が問題にしている例においては後世の人間が土から創られたことがはつきりと述べられている。これは何を意味するのであろうか。

原初におけるアダムの創造は土から、後世の人間は精液からという思想は終始一貫してコーランを流れているが、他方、それと同時に後世の人間一般も土から創られたとも見られているということは、上の例に則していえば、「汝ら」とよびかけられているものの中には後世の人間のみでなく原人アダムも潜在的に含まれている。いいかえれば、後世の人間が原人アダムと密接不可分の関係において考えられているということになる。つまり、ここでは原初におけるアダムの

創造と後世の人間の誕生とが前に見た例におけるように単に連続したものとして考えられているのみでなく、両者が完全に重なり合い、いわば二重写しとなつてあらわれている。即ち我々はここで、人間の創造において最初の人アダムと後世の人間とが連帯關係に立つ場合を見えるといえよう。このことは人間の創造の時間的構造に関して極めて重要であるばかりでなく、上記の英文モノグラフに於て詳述する終末に於ける人間のあり方と著しい対比をなす。

これまで我々は原初における創造と後世において被造物を保持、養育するアッターの働きとは不可分のものとして連続しており、ことに人間の創造に関する著しいこととして、原人アダムの創造と遙かな時間を距てた後世の人間の誕生とが表裏一体のものとして考えられているということに創造と歴史との緊密な結びつきを見て来た。次に我々は両者の間の關係を更に他の観点からみることにしよう。

まだ気がつかないでいたのか、アッターが天と地を眞実をもつて創り給うたということに。もしひとたびその氣になり給えば、お前たちなど一度に片づけてしまつて、かわりに全く新しい創造をはじめ給うであろうぞ。それくらいアッターにとつてはなにも大したことはない(一四の二二―二三)

これ皆のもの、お前がたはアッターなしにはやつて行けぬ。だが、アッターの方は何一つ欠けたところのない立派なお方。その氣におなりになれば、お前たちなど一遍に片づけて、新しいものをお創りになる。それくらいアッターにとつては何も大したことはない。(三五の一六―一八)

つまり、世界の始めに神が万物の創造を完成して了うと被造物としての自然や人間は神の手をはなれ、それぞれの秩序にしたがつて動き、創造は一回限りのこととして歴史から断絶されて了うのとは反対に、神の支配はその後も絶えることなく被造物のすべてに及び、原始における創造はそれ自体、完結しており、また完全なものであるが、神の意志が働けば創造は歴史の中に反覆され得るということである。これは人間をはじめとする生物に関してと同様に自然界に関してもい

われる。即ち、人間の場合は創造の反覆は一方では世代の交替を意味し、

もともと我らが創り出し、がつしり引き緊めてやつた彼等ではないか。我らがその気になりさえしたら、いくらでも同じようなものを新らしく創つてとり替えてやるうに。(七六の二八) 他方、創造の反覆は最終的には死んだ人間を終末に際して新らしくつくりかえること、つまり復活をさす。また自然に関して創造の反覆は終末時における天地の変容を意味する。

要するに、上述のように原初の創造は後世の被造物を保持する神の働きと連続する、乃至は創造は、遙かな時間の距りにもかかわらず後世の人間の誕生と重なり合つたものとしてコーランに於て考えられていることに創造と歴史とのつながりが見出されたとするならば、ここでは更にすすんで、アッラーの意志が働けば創造それ自体、歴史の中に反覆されうるのであり、かくて創造は歴史の中に入りこみ、これを変革することが出来るという点において我々は両者の間のより一層緊密な結びつきを認め得ると考える。

### 言葉による創造

旧約聖書創世記の創造譚は学問上、祭司資料のもの(一の一—二の四前半)とヤハウェ資料のもの(二の四—二の二五)とより成り立っているが、前者においては天地創造は神の言葉によつて行われている。即ち先ず神が「光あれよ」と言われると光が出来、「大水の間」一つの大空が出来、大水と大水の間を分けてよ」と言われるとそのようになり、「天の下の大水は一つの所に集まれ、そして乾いた所が現われよ」と言われると、そのようになり、「地は青草と種たねを生ずる草と、その中に種があつて各種の実をみのらす果樹を地上に生ぜよ」と言われるとそのようになり、「天の大空には光が生まれ、昼と夜との間を分けてよ、それらの光はしるしの為、季節の為、日の為、年の為に役立つであろう。又それらは地を照ら

す為に、天の大空にある光となるだろう」と言われるとそのようなになり、「水には生きものが群生し、鳥は地の上に、天の大空の面を飛べよ」と言われるとそのようなになり、「地は各種の生きものを生ぜよ、各種の家畜と這うものと地の獣とを生ぜよ」と言われるとそのようなになり、「我々は人を我々の像かたちの通り、我々に似るように造ろう。そして彼らに海の魚と、天の鳥と家畜と、総ての地の獣と総ての地に這うものとを支配させよう」と言われ、神は人を御自分の像の通りに創造された。(注四)

このような類型に属する言葉による創造は、旧約におけるよりはるかに単純化され、より一般的な形でコーランにもあらわれる。例えば人間の創造に關聯して、

さて、アッラーのお目から見ると、イーサーは丁度アーダムと同じようなもの。彼を泥で作っておいて、それに「なれ」とおつしやると本当に（生きた人間）になつたのだから。（三の五二） また天地創造に關して、

彼（アッラー）こそは真実をもつて天と地とを創り給うたお方。ただ「なれ」とおつしやつたその日、（天地は）出来上つた。その御言葉は真理。ラッパが吹き奏される日、一切の権能はその御手に歸す。不可視界、可視界ふたつながらに知悉し給う。まことに限りなき智恵と知識とをそなえ給う。（六の七二―七三）。或いは更に万物の創造一般について、

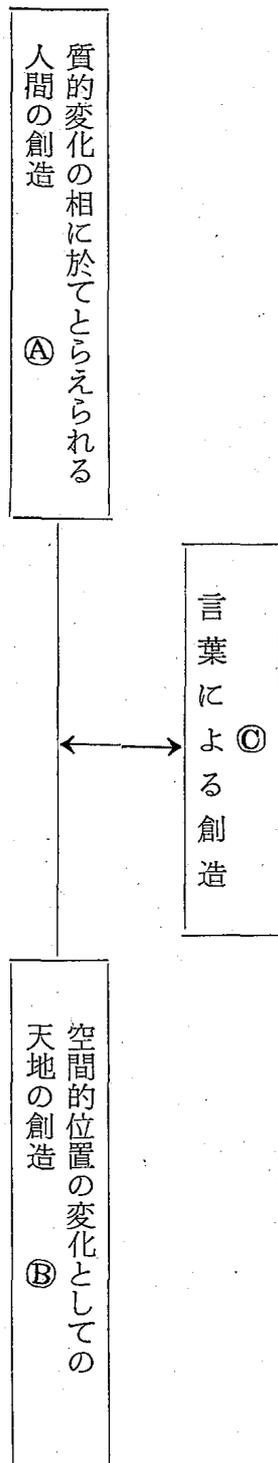
我ら（アッラー）何事かを欲するとき、ただ一言、これに「在れ」と言いさえすれば、忽ちその通りになる。（一六の四二）

まことに、我らはいかなるものも全てよく量つて創つておいた。しかも我らの命令はただ一言、目ばたき一つするようなもの。（五四の四九―五〇）

先に我々はコーランに於ける創造の基本構造として、一方では、或る単純な要素、具体的には泥乃至は精液から凝血となり、次に肉塊、次に骨が出来、皮が生ずるといふようにいくつかの段階をふむ質的變化の相において考えられている人

間の創造と、他方、地を平にし、山をその上に置き、天を七つの層に分け、海に境を設けるといふ風に、一般的にいえば、すでにそれとして在るものの形を整え、位置をきめ、秩序づける空間的位置の変化としてとらえられている天地の創造とが際立つた対照をなしているということを明らかにした。それならば、創造の過程のかような構造と、今ここで我々が問題にしているように神が「あれ」と言い給うとそのようなになるという所謂言葉による創造とはどのような関係に立つのであろうか。

質的変化の相においてとらえられた人間の創造（これを仮に①とする）と空間的位置の変化としての天地の創造（②とする）とは、その行われ方として著しい対照を見せていることは上述の通りであるが、他面、言葉による創造と対比するとき①及び②の両者は、より具体的、分析的、描写的、説明的な点では共通性をもつているといえよう。



そこで、①、②に見られるようなやや複雑な、具体的、分析的創造観と、それらと全く対照的な③に於けるような遙かに単純化された抽象的、包括的創造観とは相互に異質のものであるばかりでなく、両者の間には何ら関係すらなく、単に別のものとしてばらばらにあるのかが先ず問われる。しかし、一般に、ある関係がないということを経明するには両者の間の無限の場合を問題にしなければならず、それは理論的にも、又実際上も不可能であり、そのために努力しても解決への手がかりは得られず、また問題の展開もみられない。そこで我々は、むしろ積極的な面から問題をとりあげ、両者の間

には何らかの関係がありはしないか、あるとすれば、それはどういうものであるかという作業仮説を立てて考えをすすめて行きたい。その方が問題の解決のために遙かに有効であるから。

周知のようにコーランは予言者ムハンマドの生涯の後半約二十年に及ぶ期間に折々に啓示されたものの集大成であり、年代的にみていろいろの層が重なり合い、混り合つて今日のコーランを形作つていいるが、概括的に見て初期、中期、後期の啓示に大別することが出来る。そこで先ず次のようなことが問われる。我々がここで問題にしている相互に全く異なる二つの創造觀のそれぞれは、コーランに於ける異つた時期—例えば初期と中期、中期と後期という風に—の創造に関する思想をあらわすものなのであろうか。つまり、これら二つの創造觀の違いは歴史的乃至は年代的なものとして説明出来るであらうか。

ここで我々は、与えられた紙面の制約上、具体的な例を一つ一つ出して説明する余裕がないため、結論的にいえば、一方では、先の①、②のような具体的、説明的、分析的創造觀は初期(メッカ時代)、中期(メッカ・メディナ時代)、後期(メディナ時代)のすべてを通じて具体的な例として数多く見出すことが出来る。これに対して、他方、より抽象的、包括的な言葉による創造という思想③は、遙かに少い回数しかあらわれない。しかし乍ら、これらの具体的な例を詳細に検討して行くと、これもコーランの資料上の或る特定の時期にのみ特有のものとしてあらわれるのではなく、やはり初期、中期、後期のいずれにも見られることがわかる。つまり、ここで問題となつていいる二種の全く異つた創造觀は、それぞれ別の時期の創造に関する思想をあらわすのではなく、むしろ両者は初期、中期、後期のいずれの時期においても並存しているということである。かくて我々の問題は次の点に集中する。かようにこれら二種の創造觀の差違は異つた時期の資料によるものでないならば、際立つた対比を示しつつ各時期に於て現に並存する両者の関係は、そのほかにどのように説明されるべきであらうか。

前にも触れたように、これら二つの創造観は種々の点で非常にはつきりした対照をなす。即ち一方では、天地自然及び人間の創造が具体的に述べられているのに対して、他方、言葉による創造に於てはより抽象的乃至は象徴的にのべられている。また一方では、例えば地を敷き広げ、山を据え、道を通し、人間は精液から凝血、肉塊、骨という風に或る意味で分析的、説明的、描写的にあらわされているのに対し、他方、単に「あれ」と言い給うとそうなたたという言葉による創造はより包括的、全体的、宣言的、命令的である。更に別の観点に立つてみるならば、どちらに於ても唯一絶対の神アツラーによる天地、人間の創造が述べられており乍ら、一方に於ては、神が自然及び人間の側に立ち、いわばそこに内在しつつ創造することが描き出されているのに対し、他方、言葉による創造に於ては、アツラーは自然、人間をはるかにこえる存在として超越的に創造すると考えられている。この最後にのべたことは、今、問題となつて二つの創造観の關係を探り、ひいては言葉による創造というもののコーランにおける意味と役割とを明らかにする上で有力な手がかりを与えるものと思われる。しかし我々はここでも紙面の制約上、考察によつて得たことの結論を述べるにとどめねばならない。即ち、これら二つの創造観は種々の点で全く著しい対比を見せ、いわば相互に異質的なものであり乍ら、しかも両者は唯一絶対の神アツラーの創造という同一の事態を全く別の観点、或いは反対の立場からみているといえよう。つまり、一方ではアツラーの創造を自然及び人間に内在する立場から、そして他は、その同じ創造を自然、人間を遙かに絶する超越的な立場から。これを換言すれば、本節で我々が問題にした言葉による創造とは、創造という事態に於ける神の側の構造をあらわすものにほかならないということである。

### 無からの創造 (Creatio ex nihilo)

創造論をめぐつて後世の回教神学では「無からの創造」ということが大問題となり、神は世界をすでに在る何かから、

即ち有から創造したのか、或は全くの無から創造したかについて烈しく議論が交されたことは周知の通りであるが、回教の源泉としてのコーランに於てはこの問題はどのように考えられているのであろうか。更にいえば、無からの創造という思想はコーラン自身の中に見出されるであろうか。

先に創造の過程を人間の創造と天地の創造との対比において考察したとき見たように、最初の人アダムは泥から(七の一一)、或いは陶土即ち黒泥から(一五の二六)、或いは精選した泥から(二三の一二)等、要するに土から創られたことが繰返し、一貫して述べられており、天使は火から(七の一一)、妖霊はもえさかる炎から(一五の二七)、或いは煙<sup>けむり</sup>なし<sup>煙なし</sup>の火から(五五の一四)、つまり火から、そして人間以外の動物は水から(二四の四四)創られたとされる。またアダムの創造から連続したものの、或いは更にそれと二重写しになつていふと考えられる後世の人間一般の誕生は、精液からと説明されていることは上述した通りである。

他方、天地自然の創造について見るならば、ここでは人間創造の場合と異り、創造の素材については具体的には言及されていない。しかし、それだからといって、ここで無からの創造があらわされているといえるであらうか。それについて考えて行くために次の例はよい示唆を与える。

アッラーこそは汝らのために地上の一切のものを創造して下さつた方。そして(地上の創造が終ると)今度は天に昇つてそれを均等に七つの天となし給うた。まこと、アッラーはあらゆることに通曉し給う(二の二七)

ここでは地の創造が終つて次に天の創造が始められることが述べられているが、「今度は天に昇つて……」という素朴な、そして漠然とした表現から決定的なことは引き出せないが、神が天の創造に際して何かすでに在るものに立ち向うことを示すように先ず考えられる。又ここで、「七つの天に均等に分ける」(sawwāhunna sab'a samawātin)に於ける sawwā という語の内容に注意したい。これは上述のようにコーランに於ける創造の key term なのであるが、「ものを

平にする」、「平均にする」、「均等に分ける」等、一般的にいえば、すでに在るものに手を加えて秩序づけることを表わすのであつて、未だ存在していなかつたものをつくり出すことをさすのではない。それ故、今、我々が問題にしている例において、「天に昇つてそれを均等に七つの天に分ける」という表現に於て神が天を無から創造したことが述べられているのでは決してなく、すでに何らかの形において在つたものを分け、整えて七つの天に仕上げるという過程に於て創造がとらえられている。次に、

それから、玉座がまだ水の上にあつたところ、六日間で天を創り、地を創り給うたのもあの方。これは、汝らのうち誰が一番立派な振舞をするか試してごらんになるためであつた。(一一の九)

ここで創造に際して玉座はすでに水の上にあつたということは無からの創造とはむしろ全然逆の状況を暗示するであろうし、又この例と内容的に相応じていると思われる創世記の冒頭

始めに神が天地を創造された。地は混沌としていた。暗黒が原始の海の表面にあり、神の靈風が大水の表面に吹きまくつていた。まず神が、「光あれよ」と言われると光が出来た。神は光をよしとされた。神は光と暗黒やみとの混合を分け、神はその光を昼と呼び、その暗黒を夜と呼ばれた。かくて夕あり、又朝があつた。以上が最初の一日である。

これに関しても、神は天地を無から創つたか否かが古くから論議されて来た。しかし、今日では、すでに在つた混沌から神は天地を創造したという見解が旧約学上の定説としてみとめられている。(注五) 再びコーランの例にもどつてみると、

それ(出来上つた大地)の上に聳え立つ山々をすつぽりかぶせ、祝福を与え、四日がかかりで色々な食物をほどよく設けて、誰でも欲しいものには分けへだてなく食べさせて下さつた。それが済むと今度は天に登り給うた。その頃はまだ(天は)ただ一面濛々たる煙。そして天と地に向つて、「さ、お前たちここへ来い、喜んでくるか、それとも迷惑か」とおつしやると、「喜んで参ります」とお答えした。そこでアッラーは二日間でそれを七つの天に仕上げ、各天ごとに

その役割を言い渡し給うた。かくて我ら最下の天を数々のきらめく燈火で飾り、かつその護りをかたくした。(四一の九—一一)

ここでも地の創造の後に神が天の創造をはじめるとは、混沌とした状態ですでに在った天を秩序づけるために神が立ち向うことを示すと考えられるし、また天の創造に先立つて天と地に「お前たちここへ来い」とよびかけると天がそれに「喜んで参ります」と応じているという擬人的表現も更に上述のことを裏書きし、無からではなく、すでに何らかの形に於て在ったものの形をととのえ、秩序を与えて行く神の創造の業があらわされていると見られる。もう一つ興味深い例を示すならば、

信仰なき者どもにはわからないのか、天と地とはもと一枚つづきの縫合わせであつたのを、我らがほどこいて二つに分けた上、水であらゆる生きものを作り出してやつたということが。これでも信仰しないのか。また我ら大地の揺れを止めるために山塊をどつかと据え、それに峡谷を縦横にはしらせて道となした。これみな、なんとかして人々を正道に導こうとしてしたこと。さらにまた、我らは大空をもつて、がつしりとまつた屋根となした。(二一の三一—三三)

ここでは一枚つづき (ratq) のものとして既に在ったものを、ほどく (fataga) という過程において天地の創造があらわされている。

要するに、今まで見たことから、人間の創造に關してのみならず、また天地の創造についても、全くの無からではなく、常に何らかの形に於て既に在ったものから、すべては創造されたという見方がコーラン全体を通じて流れているということが理解されるであろう。

ところで最後に注意すべきことがある。それは、上述のことと一見相反するような表現が、非常に僅かな回数ながら——我々の調べた限りにおいては前後三回——コーランに見出されるということである。即ち、

「主よ、どうしてこの私に息子などできましよう。妻は石女いまいめ、それに私はもう御覽の通りのよぼよぼ爺でございますものを」といえば、「いや、必ずそうなるであろうぞ。主の仰せられるには、『わしにとつてはいとやすいこと。以前にも汝が無であつたのを創造してやつたではないか』と。」(一九の九—十)。

「おい、おい、それではこのわしが、一旦死んでから、また生きて引き出されるというのか」などと人は言う。以前、全くの無であつたものを我ら(アッラー)に創造して貰つたことを忘れたのか。(一九の六七—六八)

「どうせあの男(マホメット)の作り話しさ」と言うのか。いや、いや、元来、彼らには信仰心がないだけのこと。それでは彼らも一つこれと同じようなお告げを作り出して見せるがよい。もし本気であのようなことを言っているのなら。一体、彼等自身、無から創り出して戴いたのではないか。それとも、自分が創造主だとも言うのか。天や地を創り出したとも言うのか。いや、いや、彼らにはなんの信仰もありはせぬ。(五二の三三—三六)

これらの例を、一方に於て語法の点から見ると、「汝が無であつたのを創造した」と便宜上、訳されている第一及び第二の例に共通の *khalagtuka wa lam takun shay'an* という表現それ自体からは、厳密に言えば、ここで所謂、無からの創造があらわされているか否かをはつきり決定することは出来ない。しかし、逆に考えて、本当に無からの創造についてあらわそうとする場合を考えると、他の表現、例えば、*khalagtuka wa kunta ma'dūman sifan* 或いは *khuliqu wa kanu ma'dūmin sifin* 等が用いられる方が適切であり、事態をより明確にあらわすと思われる。他方、文の内容の点からみると、第一の例の問題の個所ではヨハネの父ザカリアの誕生、第二の例では復活の教えを信じない人々の誕生、また第三の例ではムハンマドの教えを作り話とする人々がこの世に生れて来た時のことという風に、いずれの場合も、極く平凡な人間の普通の誕生について述べられていることに注意したい。即ち、ここであらわされているのは、無からの創造というような、謂わば異常な、或いは奇蹟による誕生ではなく、精液からの人間の誕生というコーラン全体を通

じて終始一貫して流れている上述の創造観が、潜在的な形においてではあるが、やはりここでも底流をなしていると考えられる。従つて、先の *khalagtuka wa lam takun shay'an* 及び *khuliqū min gairi shay'in* は、それぞれ、「汝が無であつたのを創造した」というよりは「汝がまだ人間として存在していなかつたとき（人間の形をしていなかつたとき）創造した」という意味に、また「汝は無から創造された」というよりは「汝はまだ人間の形をしていなかつたもの（精液）から創造された」という意味に解すべきであると考えられる。そして非常に興味深いことに、このような解釈は次のようなコーランの言葉と完全に一致する。

人間は誰でも（人間と）よぶことの出来ない時期（受胎から生れるまでの間）を経ておるはず。そもそも我らは人間を一滴の精液から創り出して、これを試み、次いでこれにものを聞き、ものを見る能力を授け、感謝の心しる者になるか、恩知らずになるか、とにかく一度は正道に導いた。（七六の二―三）。

注

- (1) M. Sekine, *Erwägungen zur hebräischen Zeitauffassung* (Vetus Testamentum 1963)
- (2) T. Izutsu, *God and man in the Koran — Semantics of the Koranic Weltanschauung* — Tokyo, 1964.
- (3) 井筒俊彦訳「コーラン」上、中、下 昭和三九年
- (4) 関根正雄訳「創世記」昭和三九年
- (5) H. W. Robinson, *Inspiration and revelation in the Old Testament* Oxford, 1963 p. 18.